

## 第6章

### 核融合研究のアーカイブズ

木村 一枝 核融合アーカイブズ室

#### はじめに

今から四半世紀も昔のことになりましたが、私は、名古屋大学プラズマ研究所で、核融合研究企画情報センター長であった早川幸男先生（1923-1992）の秘書をしておりました。ある時、いくつかの段ボール箱に入った古い資料の整理をすることになり、それが、私とアーカイブズとの関わりの始まりでした。

当時、私には、アーカイブズの専門的知識はなかったのですが、早川先生から「お手本にするように」と、京都大学基礎物理学研究所に湯川記念館（Yukawa Hall Archival Library）を創設する際のマニュアルのコピーが渡されました。それは、イラスト入りの手作りのもので、湯川記念館で、どのように資料を整理したかが克明に書かれていました。1980年頃に Archival Library は珍しく、このマニュアルがアーカイブズという言葉と、その意味することを学んだ原点です。

これからお話することは「核融合アーカイブズ事始め」というようなことですが、アーカイブズを創設するという研究所の方々に参考になれば幸いです。核融合科学研究所にアーカイブ室が発足する以前の経緯を話すわけですが、特に2つの点を強調したいと思います。1つは、自然科学系の研究所においては、研究者は、将来に向けて研究を進展させることが一義的なこととして求められるので、アーカイブズの意義がなかなか受け入れられなかったということです。もう1つは、歴史を研究することは科学史家の守備範囲であって、自然科学研

究者には関係ないと思われがちですが、アーカイブズと科学史は性質が違い、アーカイブズを通して自らが専攻する研究分野の歴史的流れを理解することは研究者が関心をもたなければならないということです。

核融合アーカイブズが成立するまでのプロセスを3つの時期に区切って説明します。

## 1. 1970年代終わり～1980年代半ば／早川幸男・元名古屋大学学長の遺したこと

早川先生は、多くの共同利用研究所の創設に関わってこられました。アーカイブズについては、その必要性を早くから認識されていて、特に、「学問としては、まだ歴史が浅い核融合研究においては、アーカイブズが重要である」（早川先生談）と考えておられました。ここにご参加の皆様は核融合研究を専門とされていない方がほとんどですので、アーカイブズの歴史に合わせて、核融合研究がどのように発展してきたか簡単に説明したいと思います（【図表1】参照）。

大まかな言い方ですが、核融合研究の始まりについては、1955年8月にジュネーブで第1回原子力平和利用国際会議が開催されたことが契機とされています。その元になった考え方は、1953年12月8日にアイゼンハワー米大統領が行った「原子力の平和利用」についての演説です。

日本では、1950年代後半からいくつかの大学で核融合研究が始まります。溶接学、天体物理学、放電など理学部や工学部のさまざまな分野の研究者によって核融合の研究会が組織されました。【図表1】の1956年の欄に示しているのは、日本における核融合研究草創期の学問分野と主な研究者の名前です。

大学、官公庁、民間を含んだ全国規模の核融合研究者の最初の組織化である「核融合反応懇談会」は、1957年2月に原子力委員会の主催で始まりました。この会は科学技術庁の予算で運営され、原子力局が実務的な仕事を引き受けました。しかし、「核融合反応懇談会」は2回開かれただけで、1958年2月には、研究者の自主的な運営の全国的組織である「核融合懇談会」が発足します。必要な研究費は文部省予算の科研費に求め、核融合研究に関心のある研究者の自

由な集まりで、誰でも参加できること、大学、官公庁、民間の出身を問わず、共に研究活動をすることが強調されています。

世界に、ほとんど遅れをとることなく研究を始めた日本が、どのように核融合研究を進めるかにあたっては、真剣な議論が展開されました。研究者個人の意見が反映される「核融合懇談会」、文部省の方針決定に実質的な影響力を持っていた日本学術会議、原子力委員会の核融合専門部会などいろいろなレベルで審議、検討されました。1961年に学術会議の勧告に基づいて、名古屋大学プラズマ研究所が全国共同利用研究所として創設されましたが、これは、核融合研究を、基礎としてのプラズマ物理学から始めるためでした。一方、ある程度の大きさの装置を作って、開発研究や目的研究をしていくという方向は、日本原子力研究所が取り組んでいくことになります。

【図表2】は核融合アーカイブズの歴史を記しています。1983年3月に出された「我が国における初期の核融合研究に関する調査」は、資料目録ですが、核融合アーカイブズの始めの一步と言っていると思います。この資料目録が作られた背景には、名古屋大学プラズマ研究所附属核融合研究企画情報センターが1977年に設置され、アーカイブズに理解のある早川先生がセンター長として就任されたことが考えられます。

その頃、東大科学史研究グループの中山茂(当時東京大学教授)、米本昌平、荒井克弘、塚原修一、吉岡斉の諸氏が、新しい萌芽的な研究活動から専門分野として確立していくまでのプロセスを研究対象としていて、そのケーススタディとして核融合を取り上げ、1979年11月にプラズマ研究所をインタビューのために訪れました。早川先生は記憶力がよく、さらさらと広範な学問分野と研究者名を書いただけの1枚のOHPで、3時間くらいインタビューに答えられたのですが、後のために、資料を残さなければいけないと痛感されたようです。

ところで、大学における核融合研究は、1961年の名古屋大学プラズマ研究所設立の後、京都大学に超高温プラズマ研究施設、大阪大学に超高温理工学研究施設とレーザー研究施設が次々設置され、研究環境が整備されていきました。核融合研究においては、異なる方式による高温プラズマの閉じ込めや、レーザー核融合における爆縮など、プロジェクト的な研究が遂行され、その研究規模が拡大するにつれ、これらの研究施設は、1976年から1979年までに、京大

学ヘリオトロン核融合研究センター、大阪大学レーザー核融合研究センターとなりました。その後、新たに、広島大学核融合理論研究センター、筑波大学プラズマ研究センターが設置され、研究体制が充実しました。

また科学技術庁管轄の日本原子力研究所でも幾つかの実験装置の経験を経て、1973年には臨界プラズマ試験装置 JT-60 装置の概念設計に着手しました。長期的な研究が必要な核融合では、“基礎から開発までの研究”と、それを通じての人材養成を主に大学関係が担当し、“開発から実用まで”を原子力研究所などが担当するという補完的な関係が文部省と科技庁の間で機能していて、省庁統合まで続けました。

1980年に大学における核融合研究について文部省学術審議会の建議が出され、大学等における核融合研究の基本方策として、(1)核燃焼を指向した研究の推進、(2)トカマクに代わる方式の育成、(3)広範な関連分野における研究の推進が掲げられました。1980年から10年間、文部省の科学研究費「エネルギー特別研究(核融合)」(1986年からは「核融合特別研究」)によって、研究の充実が図られ、核融合コミュニティに、炉工学などの関連分野の研究者が加わってきた時代でした。潤沢な研究費の投入は、核融合に対する社会からの大きな期待を表していたと思われます。

これから、飛躍的に研究を進展させようという時に、1950年代後半の核融合関係の資料目録を作成し、その費用を科研費から出したのですが、このアーカイブズの始めの一步は、容赦のない非難を浴びてしまいました。科研費の報告会で、刷り上がった冊子を前に、大事な研究費は、研究そのものにだけ使われるべきで、過去の資料の整理などに使うとは不謹慎極まりないという批判が出ました。担当教官が、散々つるし上げにあった挙句、ようやく「早川先生の提案なら仕方ない」という理由で赦されたそうです。目録作成の趣旨は、新しい学問だからこそ、学問体系の確立のために、アーカイブズが必要なのだということでしたが、そんな考えが認められた訳ではありませんでした。当時としては、研究の上り坂の大事な時期に資料整理にお金を使うなどということは、社会に対して説明責任を果たせないという雰囲気だったと思います。目録を作成した当事者の私としては、ひたすら身の縮む思いでした。

しかし、早川先生は認識の違いとしか捉えなかったのか、そのようなことは

意に介さず、私にプラズマ研究所設立までの経緯を纏めるよう言われました。KEK 設立の経緯を、主にオーラルヒストリーによって纏めた論文 (Lillian Hoddeson, “Establishing KEK in Japan and Fermilab in the US: Internationalism, Nationalism and High Energy Accelerators” 1983) を参考にするとということでした。私は、それまでインタビューというのは、新聞、雑誌、テレビなどジャーナリズムの手法だと思っていたので、研究論文でも、インタビューをベースにした書き方があることを知り衝撃を受けました。KEK の創設に関して著者ホディソンのインタビューを受けた早川先生は、インタビューの有効性に興味を持ち、プラズマ研究所の創設に至る歴史を纏めるのに、同じような試みをしてみたかったのではないかと思います。

当然、プラズマ研では、資料の整理をして文章に纏める作業などに予算措置をする状況ではなく、インタビューなどとても望めることではありませんでした。仕方なく、文書資料のみに基づいて、事実にあたる歴史の骨組だけを私が自宅で細々書き綴ったのが「核融合研究事始め」(早川幸男、木村一枝「核融合研究」1987, Vol. 57, p. 201, 271, 364) です。「初期の核融合研究の資料目録」と「核融合研究事始め」は、あまり、好意的な雰囲気ではない中で印刷物として残したのですが、今となってはアーカイブズを進めるようにとおっしゃった早川先生の遺言のような位置づけを持った資料として評価されるようになりました。また、オーラルヒストリーの奥深さと難しさを理解できる現在は、あの時、一人でインタビューなど無謀なことをしないでよかったと胸をなでおろしています。

## 2. 1980 年代後半～1990 年代後半／科学史家のした仕事

1980 年代の後半に、名古屋大学理学部に留学していた科学史専攻のオーストラリアの大学院学生モーリス・ロー (Morris F. Low) が核融合関係の早川資料を整理し、また、1990 年代に入ると科学史を専門とする日大の西尾成子教授が核融合を研究課題とされ、大学関係だけでなく日本原子力研究所の核融合研究も含めた広い範囲を対象に研究を始められました。それはやがて、日本原子力研究所の委託調査報告書という形で纏められ、多くのインタビュー記録や貴

重なる調査・研究が残りました（【図表2】参照）。このような外からの助けを得て、核融合研究におけるアーカイブズの全くの不毛の状態は免れました。

1986年2月、文部省学術審議会核融合部会は大学の研究方法を一本化するために「大学における今後の核融合研究について」の中で、1) 次期大型装置はヘリカル型で土岐市に建設、2) 新たに大学共同利用機関を設立、3) ヘリカル以外の研究は既存装置にて引き続き推進する、などの点を提言しました。これに基づいて核融合科学研究所が発足します。1985年には、原研で建設中の臨界プラズマ試験装置 JT-60 が完成し、実験が開始されています。

プラズマ研究所では、移転に備えてプラズマ研究所に保管されていた資料を整理して段ボール箱に入れる作業が、当時プラズマ研究所教授であった寺嶋由之介、大林治夫、藤田順治を中心に行われました。しかし、アーカイブズを業務とする主体があったわけではないので、核融合科学研究所の創設とプラズマ研究所の廃止に伴う状況の中で、資料の破棄、散逸も生じ、不本意な状況でした。科学史家の仕事は、核融合コミュニティのために為されたわけではなかったけれど、結果として次の時代へ繋げる役割を果たしてくれたと言えます。

最初に紹介した湯川アーカイブズのマニュアルには、「ヒストリアン3悪」という直截な表現で書かれたページがあります。すなわち、科学史家は、「Paraphrasing(ふくらまし)、Requoting(まごびき)、Peeping(でばかめ)」というような過ちを犯しがちであるということです。また、科学史研究者の話では、科学史というのは研究者個人の歴史観が重要な意味を持ち、収集する史料は、研究者の価値判断のもとに選択され、手に入れたものは抱え込んでしまうことがあるそうです。それでは、抱え込まれてしまった史料は、その学問分野全体のために寄与することなく死蔵されてしまうおそれがあり、同じ史料を基にして、違う立場で議論し合う機会も失われます。

アーカイブズでは、中立、公平に資料を収集し、広く公開して利用されることを目的とします。1990年代の終わり頃には、核融合の研究者も次第にアーカイブズのイメージが明確になってきて、核融合研究の歴史を科学史家に任せておくのではなく、自分たちの歴史として蓄積していくことを具体的に始めなければならないという段階に来ていました。

### 3. 1999 年～2004 年／アーカイブズ共同研究の立ち上げとその活動

1989 年に核融合科学研究所が発足し、プラズマ研究所からの移転は、建物の完成に伴い数年かけて行われ、資料は最終的な移転の際に搬出されました。おおまかな分類と簡単な目録作成をすませた資料を入れた段ボール箱が、核融合科学研究所加熱実験棟へ搬入されました。

これらの資料を整理して、いずれ公開できるようにしようとして定年退官の元プラズマ研究所の教授たちが準備を進め、1999 年度から、「我が国の大学における核融合研究に関する資料調査研究」(代表者：西尾成子日大教授)が共同研究として認められ、私も、資料を整理して、その目録をデータベースにする作業に加わりました。最初は、10 人の共同研究者から始めたのですが、毎年、少しずつ協力者が増えて 2004 年度は 14 人になりました。アーカイブズの専門家のいない状態で、データベースのフォーマットの作成から始め、共同研究者で相談しながら進めてきましたが、どうにか現在の核融合アーカイブズの核になるものを形成できました。その過程で、書物や外部のワークショップへの参加によって学んだことを生かして、史料保管やオーラルヒストリーの技術の向上に努力を注いできました。

ここ数年、プラズマ・核融合学会で研究発表し、核融合科学研究所での共同研究の報告会で成果を報告することにより、アーカイブズに対する啓蒙活動となり、核融合アーカイブズ創設の素地ができてきたと思います。

世界の核融合研究は、すでに黎明期から半世紀を越え、国際協力のもとに国際熱核融合実験炉 ITER(International Thermonuclear Experimental Reactor)の建設を目前にするまでに発展しました。ITER は 1987 年から概念設計が始められ、当初、米国、ソ連、EC、日本の 4 極の協力関係でしたが、政治や経済の影響で、一時、米国が抜けたり、ソ連、EC は、それぞれ、ロシアと EU に変わり、近年はカナダ、中国、韓国も加わって、政府間交渉のレベルで実験装置の設置場所の問題が検討され、その最終段階にきています<sup>1</sup>。

<sup>1</sup> 2005. 6. 28 モスクワで行われた 6 極地域関係者会議で、ITER の設置場所は、フランスに決定

【図表1】核融合関係の歴史

1953. 12. 8	President Eisenhower' s Address, "Atoms for Peace" (at the United Nations General Assembly)
1955. 8	The 1st International Conference on Peaceful Uses of Atomic Energy (Geneva) 日本における核融合研究開始
1956	基礎物理学研究所研究会 湯川、武谷 天体物理 (畑中、林、早川)、核物理 (中村) 統計力学 (木原、小野) 大阪大学超高温研究会 伏見、岡田 溶接工学 (荒田)、放電物理 (堀江) 実験的研究 東京：加速器 (宮本、大河)、 名古屋：放電 (山本) 大阪：溶接 (岡田、荒田、有安)、 会社：(日立、東芝、富士、三菱)
1957	核融合反応懇談会 (科技庁) 研究方針 基礎から A 中型装置から B
1958	核融合懇談会(研究者)基研、阪大 湯川 「核融合研究」発刊 日大
1959	核融合特別委員会 嵯峨根達吉 学術会議勧告「プラズマ研究所創設」
1961	名古屋大学プラズマ研究所創設 (全国共同利用研究所)
1966. 4	京都大学超高温プラズマ研究施設
1967. 4	大阪大学超高温理工学研究施設
1969	原子力特定総合研究「核融合研究開発」始まる
1972. 4	大阪大学レーザー研究施設
1973	原研 JT-60 装置の概念設計着手
1975	文部省学術審議会答申、大学等の役割として次の3点を指摘 (1) プラズマ物理学等の関連新学問分野の確立 (2) 大学等が擁する豊富な学問分野から学際分野の研究への寄与 (3) 核融合という長期開発に対処するための人材育成
1976. 4	京都大学ヘリオトロン核融合研究センター、大阪大学レーザー核融合研究センター



1978. 4	広島大学核融合理論研究センター
1979. 4	筑波大学プラズマ研究センター
1980. 4	電通大新形レーザーセンター、富山大学トリチウム科学センター
1982. 4	九州大学超伝導トカマク
1980. 11	文部省学術審議会建議「大学等における核融合研究の長期的推進方策について」 1. 核燃焼を指向した研究への着手 2. トカマクに代わる方式の育成 3. 広範な関連分野における研究の振興
1980-1989 科研費「エネルギー特別研究(核融合)」	
<u>プラズマの閉じ込め方式</u> 磁場閉じ込め 内部電流環状系 トカマク 原研、九大、プラ研 外部電流環状系 ヘリカル 京都ヘリオトロン 開放系 ミラー 筑波 慣性系 レーザー 阪大レーザー	
1985	原研 建設中のJT-60 装置完成 実験開始
1986. 2	文部省学術審議会核融合部会「大学における今後の核融合研究について」 1) 次期大型装置はヘリカル型、土岐市に建設 2) 新たに大学共同利用機関を設立 3) ヘリカル以外の研究は既存装置にて引き続き推進
1987	ITER (International Thermonuclear Experimental Reactor) 国際熱核融合実験炉 概念設計 4極(日、米、ロ、EU)
1989. 5. 29	文部省核融合科学研究所発足 名古屋大学プラズマ研究所廃止 京都大学ヘリオトロン核融合研究センターの一部および広島大学核融合理論研究センターを転換
1992	ITER 工学設計(～1998) 規模縮小 サイトについて現在政府間交渉

## 【図表2】核融合アーカイブズの歴史

## I 早川幸男元名古屋大学学長の遺したこと

## 1. 1983. 3 「我が国における初期の核融合研究に関する調査」

資料目録 科研費エネルギー特別研究

(核融合) 総合総括班

提案者：早川幸男、事業責任者：長尾重夫

背景

1977. 4. 1 名古屋大学プラズマ研究所企画・情報センター設置

1978. 4. 1 早川センター長

1979. 11 中山茂 (当時東京大学教授) と科学史研究グループによるインタビュー

米本昌平、荒井克弘、塚原修一、吉岡斉

(新しい萌芽的な研究活動が発展し、専門分野として確立していくまでのプロセス)

1980. 4. 1 京都大学基礎物理学研究所 湯川記念館史料室創設

YHAL (Yukawa Hall Archival Library)

YHAL Resources

Classification scheme の作成 (河辺六男、小沼通二)

Model は Niels Bohr Library at American Institute of Physics

## 2. 1987 早川幸男、木村一枝

「核融合研究事始め」核融合研究 Vol. 57, p. 201, 271, 364

文書資料のみに基づく歴史事実とその史料の記載

早川教授の意向：Oral history によるプラズマ研究所の創設の歴史

背景

1983 Lillian Hoddeson, Establishing KEK in Japan and Fermilab in the US:

Internationalism, Nationalism and High Energy Accelerators

Social Studies of Science (SAGE, London Beverly Hills and New Delhi), Vol. 13

(1983), 1-48 Oral history をベースにした科学史

早川教授はHoddeson のインタビューを受けている。

(1980. 5. 28 at Fermi Lab, 1981. 3. 31 in Chicago)

また、Hoddeson へ書簡を送っている。(1981. 1. 16, 1981. 2. 18)

1986 「プラズマ研究所25年史」作成のため史料収集 (寺嶋由之介)

## II. 科学史家の仕事 (1980年代後半～1990年代後半)

アーカイブズとしては主体的に仕事をしなかった時代、史料散逸。

## 1. Morris F. Low (による早川資料の整理 (1980年代後半)

(Assistant Professor, Dept. of the History of Science and Technology, The Johns Hopkins University as of 2005. 1. 1)

Morris F. Low, Shigeru Nakayama, and Hitoshi Yoshioka, *Science, Technology and Society in Contemporary Japan* (Melbourne: Cambridge University Press, 1999)

2. 西尾成子日大教授

- (1) 1995.2 日本原子力研究所委託調査研究  
「核融合研究の歴史-委託調査報告書」
  - (2) 1996.2 日本原子力研究所委託調査研究  
「核融合研究発展に関する情報収集及び調査-委託調査報告書」
  - (3) 1997.2 日本原子力研究所委託調査研究  
「核融合研究発展に関する情報収集及び調査-委託調査報告書」
- (2) (3) はプラズマ・核融合学会(飯吉厚夫会長)が受託

科学史とアーカイブズ: 史料に対する姿勢の特徴

科学史: 科学史家の歴史観に基づく史料収集、史料を個人所有する可能性

アーカイブズ: 歴史観に関係なく中立、公平な史料収集、公開を原則とする

III. 核融合科学研究所における共同研究の立ち上げとその活動

1994 プラズマ研究所から核融合科学研究所への最終移転に伴い、資料の搬出、おおよかな史料の分類と簡単な目録作成、核融合科学研究所加熱実験棟へ搬入

1999～2004 「我が国の大学における核融合研究に関する資料調査研究」(代表者: 西尾成子日大教授) 核融合科学研究所における共同研究として採択された。共同研究者は、1999年度11名、順次増え2004年度15名。

共同研究における活動

1. 史料収集・整理・保管
2. 史料目録のデータベース作成
3. 年表作成
4. Oral history (インタビューによる史料補充)
  - \*関口忠(東大名誉教授)
  - \*Shafranov, V. D. (クルチャトフ研究所)
  - \*松浦清剛(元プラズマ研究所R計画デザインチームリーダー)
  - \*森野信幸(元日立製作所)
5. ワークショップへの参加
  - \*KEK-UCLA Joint Workshop (at KEK, 2003)
  - \*UCLA-Sokendai Joint Workshop on Archives(at the UCLA) 2003
  - \*KEK-UCLA Joint Workshop on KEK Archives(at the UCLA) 2004
  - \*KEK-総研大ワークショップ「大学共同利用研究所・研究機関の成立」(at KEK, 2005)

## 4. 核融合アーカイブ室の現状の課題

### 4.1. 史料の保管

幸い、核融合科学研究所において、核融合アーカイブ室は史料の保管場所を得ていますが、まだ保管に関する課題を解決していません。酸性化防止処置のしてある保管箱や封筒を使わなければならないし、史料そのものも、1950年代のものは、わら半紙が茶色になって、触るとハラハラ崩れます。早急に永年保存可能な中性紙にコピーしなおさなければなりません。素材の劣化や保存環境の問題などすべてこれからの課題です。検索・出納のしやすい保管の仕方についても検討中です。

### 4.2. 核融合アーカイブズの意義と必要性

核融合コミュニティにおいて、アーカイブズに対する理解を深めてほしいとの願いから、共同研究者はプラズマ・核融合学会など機会あるごとに、なぜ核融合の資料を保存するのかについて説明しています。アーカイブズの活動を続けてきた共同研究者の各々の思いや使命感は独自のものがありますが、そのために、アーカイブズの必要性も意義も、それぞれの考えを反映して厚みのある重層的な表現になっています。それらをいくつかのキーワードで述べてみたいと思います。

#### ・温故知新

目標に向かって研究を遂行していく過程で、個人にとっては、メモ、研究ノート、論文の草稿、関連する論文、手紙、メール、研究会で配布される資料、書物、記録、日記など、研究所にとっては、会議の議事録、経理の記録、その他の公文書など多くの記録が蓄積されていきます。これらは、研究の流れを理解する上で、必要な史料となります。次の進路をどうするか判断をくだす時や研究の方針を立てなおす時、議論や検討に必要な事実の蓄積がある事は重要です。

- ・ 社会に対する説明責任

社会は急速に変化し、21世紀の科学は人類の持続可能な社会をもたらすために厳しい役割が課せられています。エネルギー問題や環境問題に対して核融合が求められていることに応じていかねばならないので、適切な提言をしていけるだけの信頼される研究を維持しなければなりません。核融合は巨大(巨費)科学ですので、多くの費用を使わねばならない理由を、社会の枠組みの中で、市民にも、また他分野の研究者をも納得できるだけの説明をしなければなりません。核融合研究の進め方や、そのプロセスを公にいていく事は、一般市民の理解を得るために必要な前提条件です。

- ・ 実験科学としての核融合

核融合それ自体実験科学ですが、その推進に当たって払われた立案・実施の努力そのものが、一つの実験的活動といえます。新しい研究領域を切り開いていく努力のプロセスを資料として残すことにより、世界の重要な一角を担ってきた日本独自の核融合の歴史が明らかになります。

- ・ 核融合コミュニティのアイデンティティ

学問体系の確立には歴史は不可欠で、多くの一次史料の蓄積なくしては、それは望めないことです。人類が直面している環境や資源の難題に対し、すべての人が責任のある行動をとらなければなりません。科学者に委ねられている事も多くあります。その役割を科学者が果たし続けるには、後に続く若い研究者が、誇りを持って核融合研究に取り組められるように、研究における自分の位置づけをきちんとできるようにしなければなりません。先人たちの業績だけでなく研究への姿勢や使命感も含め、残されたものを遺産として伝えていくことが、核融合コミュニティの力強いアイデンティティ形成に有効な助けとなるでしょう。

### おわりに

多くの方の支援を得て、核融合アーカイブ室が創設されたことは非常にうれしいことであり、感謝しておりますが、同時に責任も感じております。共同研

究者は、アーカイブズを一つの研究活動として捉え、テーマを掲げた歴史研究、読む年表、オーラルヒストリーの手法を活用した記録などを魅力あるものとして提示できるよう、それらの蓄積に努めています。

また、核融合科学研究所は全国共同利用研として、核融合を研究している他の研究機関の史料の収集、保存も視野に入れ、新たな共同研究者の参加を呼びかけました。今後は核融合アーカイブズに関して、恒常的に偏りなく史料を収集し、順次、公開できるよう準備していきたいと思っています。

これからも、このような研究会を通じて、アーカイブズの手法・技術に関する情報を他分野、他機関の研究者と共有し、より優れたアーカイブズを目指したいと考えております。